シンポジウムを終えて

所長　針生清人

それぞれに新しい段階に向って動き出している日韓両国は、すでに社会の構造、諸制度、意識の上に大きな変化を見ながらも、なお新たに起りつつある様々な問題に直面している。しかも近代化に伴なって起る問題は全てが連動しているといえる。例えば、都市化と人口移動、出生率、高齢化社会、伝統的な世代区分の変化、老人福祉、家族構成、核家族化等の問題は社会構造の変化によって生ずる問題であって、そのうちの一つを取り出して論ぜらるべきものではない。また、それらは世界に普遍的な問題であるにしても、その現れ方、受け止め方において各国に特殊である。

近代化にかかわる様々な問題について、我々はどのようなアプローチが最も適切、有効であるか直ちに予告できぬが、それを求め一歩をすすめて日韓両国の当面の問題を考えるところから始めようとしてシンポジウムが設定されたのである。

シンポジウムは期せずして、近代化を反省するところからその基底と過程が問題となり、日韓両国の文化社会、価値規範、近代化過程での諸変化の相異を明らかにすることから始まった。ごく大雑把にいえば、韓国側の報告の基調は近代化の遅れて始まったことの理由を、李朝、日本統治下、朝鮮動乱および現在に至るまでの各時代の歴史背景に見ながら、韓国社会の基底に通貫する儒教文化と両班が近代化に果した明暗両様の役割に見ている。また、産業社会への進展に伴なって伝統的価値観の喪失からアノミー論争が今日的話題であることが指摘されると共に、近代化を促進する人材養成も伝統文化を基盤に人間性ある、国籍ある教育の重要性が主張されたところである。これに対して日本側の報告は、同様の反省に立ちながらも、近代化の進行そのものに関わるところに問題を見ているようである。それは、人口問題、漢字文化、儒教を根本とした国民教育等の問題が近代化促進に果した役割であること、また近代化を支える基盤である地域社会になお半ば制度化して残る伝統、教育においても繰り返される伝統回帰への志向があり、それらを近代化促進と関連して考えようとするところがあった。何れにしても、日韓両国の関心は伝統的な生活慣習、意識の上に近代化がどのようにすすめられるべきか、にあったといえよう。

また会場から寄せられた問題提起も、儒教、仏教、キリスト教が近代化に果した役割、韓国実学派と開化運動、日韓儒教の比較、封建遺制の見直し等、伝統文化の側面から近代化を見ようとする発言が多かった。が、また、儒教文化だけではなく、NICS などについては geopolitics 面からも考えるべきであり、テクノストラクチャーの養成等の現代的問題があること、この種のシンポジウムを日本・韓国・中国に広げるべきであることなどが提言された。

幾つかの不備は今後の研究交流にまつにしても、多くの人の協力による

ものであったことを感謝する次第である。

講師紹介

朴（パク） 在（チェー） 侃（ガン）

大正一三年　生
昭和二三年　ソウル大学校商科大学経済学卒業
　　韓国老年学会長

著書

「老人問題の対策」
「高齢者教科書」
「韓国孝行實録」他

講師紹介

河野（この） 稠果（しげみ）

昭和　五年　広島県生
昭和三三年　米国ブラウン大学 ph. D（社会学）
昭和三三年　厚生省人口問題研究所に入る
昭和四二年　国連本部人口部勤務
昭和四八年　国連本部人口部人口推計課長
昭和五三年　厚生省人口問題研究所に戻る
昭和六一年　同所長

専攻　人口学
学位　社会学博士

著書

「世界の人口」他

講師紹介

柳（リュウ） 時中（シジュン）

大正一四年　生
　　韓国国立慶北大学校社会学科卒業

論文

「韓国老人の生活実態」
「韓国地方大都市における階層構造に関する実証的研究」他

講師紹介

高橋（たかはし） 統一（とういち）

昭和　二年　東京都生
昭和一九年　東京都立大学人文学部社会学専攻卒業
昭和三一年　同大学院社会科学研究科
　　社会人類学専攻修士課程修了
昭和三二年　東洋大学文学部専任講師
昭和三四年　同社会学部専任講師
昭和三七年　同助教授
昭和四五年　同教授

専攻　文化人類学
学位　文学修士、社会学博士

著書

「宮座の構造と変化―祭祀長老制の社会人類学的研究」
「文化人類学ノート」（共著）
「ニグロ・アフリカの伝統的社会構造」他

講師紹介

郭泳宇

昭和一一年　生
昭和三二年　ソウル大学校師範大学卒業
昭和四七～
五四年　筑波大学大学院博士課程留学
学位　教育学博士
著書
「現代教育経営の諸問題」
「韓国教育政策の探索」他

講師紹介

倉内史郎

私立大学学長シンポジウムに記載

講師紹介

針生清人

昭和一〇年　生
昭和三五年　東洋大学文学部哲学科卒業
昭和三八年　同大学院文学研究科哲学専攻
修士課程修了
昭和三九年　同文学部助手
昭和四三年　同講師
昭和四六年　同助教授
昭和五四年　同教授
昭和五八年　同アジア・アフリカ文化研究所所長
専攻　日本思想史
学位　文学修士
著書
「哲学新論」（共著）
「知性の探究」（共著）
「論理学を学ぶ人のために」（共著）他